常照
第８３５号

ふたつにわかれる「正信偈」

「帰命無量寿如来」から始まる、七言六十行百二十句の偈文。浄土真宗のお勤めでは一番馴染みがある勤行かもしれません。ここには、何が説かれているのでしょうか？

「正信偈」の内容は、大きくふたつにわけることができます。まず、親鸞聖人の「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無します」との告白の後、「依経段（えきょうだん）」と「依釈段（えしゃくだん）」とよばれるふたつに大別されます。

「依経段」で弥陀・釈迦の登場

依経段とは、経によって讃えられる段です。経とは浄土真宗の根本経典たる「浄土三部経」＝『大無量寿経』（大経）・『観無量寿経』（観経）・『阿弥陀経』（小経）であり、その中でもっとも大切とされる大無量寿経にもとづいて説かれています。「法蔵菩薩因位時（ほうぞうぼさついんにじ）」から「難中之難無過斯（なんちゅうしなんむかし）」までの部分です。

大無量寿経の序文のお話です。お釈迦さまが王舎城の霊鷲山で一万人をこえる人びとと、数多くの菩薩がたを前にして、お説法をされたときです。仏弟子の阿難尊者が「今日のお釈迦さまは、いつもと違い、お

顔がひときわおごそかに輝いておられ、このような素晴らしいお姿は、いまだかつておがみ見たことはございません」とお釈迦さまに告げる場面があります。そして、お釈迦さまがこの世に生まれ、お覚りをひらかれたのは、ひとえに苦悩する人びとを救う『大無量寿経』を説くためであったと宣言されるのです。

つづいて、お釈迦さまの説法がはじまり、法蔵菩薩が阿弥陀如来になられた、そのお徳をたたえられます。依経段はさらに、こうした大無量寿経を中心に、阿弥陀如来のみ教えについて述べられた部分と、お釈迦さまがおすすめになる部分のふたつに、わけることができます。「法蔵菩薩因位時（ほうぞうぼさついんにじ）」から「必至滅度願成就」までが阿弥陀如来のみ教えで、「如来以興出世（にょらいしょいこうしゅっせ）」から「難中之難無過斯（なんちゅうしなんむかし）」までがお釈迦さまのおすすめです。

「依釈段」で七高僧の登場

阿弥陀さま、そしてお釈迦さまにつづいて、次にインド・中国・日本の七人の高僧がたが登場されます。「印度西天之論家」から「唯可信斯高僧説」までです。この方々が、お念仏のみちについてお経をもとに教理を組織的に述べられた「論」や、お経や論の「解釈」をあらわされ、ひとりでも多くの人びとが救われる教えをしめして下さいました。この高僧がたのおかげで親鸞聖人は阿弥陀さまの本願、お釈迦さまのご本意を

知ることができたのです。それは今、私たちが歩むべきお念仏の道のことです。

こうした七高僧がたの論釈による部分が「依釈段」です。

浄土真宗では、なぜ般若心経をあげない？

以上のとおり正信偈には親鸞聖人が出遭った教えがまとめられており、浄土真宗というご宗旨のすべてが説かれているといっても過言ではありません。しかし一般的には、「色即是空　空即是色」「ぎゃーてーぎゃーてー　はーらーぎゃーてー」という般若心経の方が有名かもしれません。わずか三百文字ほどに集約された経文は写経をする方を始め、真言宗や禅宗では日常的にお勤めされるものです。般若心経をお勤めしないのは日蓮宗と浄土真宗くらいでしょうか。では、般若心経とはどんなお経で、なぜ浄土真宗でお勤めしないのでしょうか？

『西遊記』で有名な三蔵法師の玄奘（げんじょう）が翻訳した六百巻にものぼる『大般若波羅蜜多経』とよばれるお経があります。この中心部、いわばエキスが『般若心経（般若波羅蜜多心経）』なのです。「般若」とは真実を正しく見抜く智慧です。「波羅蜜」とは、覚りに到達するための菩薩の実践行です。般若心経は、真実を見ぬく知恵と菩薩の実践行によって煩悩を断ち切り、仏の覚りに至ろうとするものです。しかし、ひとくちに「煩悩」を断ち切るといっても容易ではありません。自ら

の力によって煩悩を断ち切ろうと教える般若心経に対し、正信偈では阿弥陀如来のお力に一切のはからいを捨てておまかせし、それによって救われたよろこびが説かれています。

つまり、私たち真宗門信徒が『般若心経』をおつとめし、写経することは、阿弥陀如来のお力を疑うことになります。般若心経をあげないのはそのためです。正信偈には「不断煩悩得涅槃」の一文に著されています。

※正信偈もの知り帳
著者　野々村知剣
出版社：法蔵館を抜粋、加筆し一部変更して掲載させていただきました。

八月の常例布教(ご法話)のご案内

○前　期　八月七日(月)～十一日(金)
大阪教区 石川南組 専光寺
講師　多田大樹師

○後　期　八月十三日(日)～十六日(水)
大阪教区 島上西組 常見寺
講師　村田朝雅師

○場　所　小樽別院内

○時　間　午後二時(法要終了後)～
午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX　二九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一一六一六番